
隠れ姫の憂鬱

キズナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

隠れ姫の憂鬱

【Nコード】

N2950T

【作者名】

キズナ

【あらすじ】

私、こと「サラ」は、5年前にこの世界にやってきた。まさかトリップ？え、でも何で姿が変わってるの？しかも10歳の貴族の姫に。あれから5年。美形兄2人に蝶よ花よと可愛がられる、そんなお話。

1（前書き）

初投稿です。拙い部分もあるかと思いますが、よろしく願ひいたします。

気がついたら、私はココにいた――

なぜかなんて、分からない。

だから、聞かないで欲しい。

それを知りたいのは、他でもない、この私なのだから。

「サラ」

「サラ、ここにいたのか」

幾分耳慣れた、この甘ったるい美声を聞いて、私は色とりどりの花をジッと見ていた顔を上げて

後ろを振り返った。もちろんしゃがみこんだままで。

そこにいたのは、2つの美声の持ち主。ジルンアス兄様と、カイルアス兄様。

「ジン兄様、カイ兄様」

私がそつと名前を呼べば、二人とも目尻をこれでもかっけてくらい下げて微笑む。

ジルンアス兄様——通称ジン兄様——は上の兄だ。年齢23歳。陽を反射してキラキラする金髪を、耳の下くらいで切り下ろしている。

初めて触れた時はあまりのサラサラ具合に、羨ましさを通り越して妬ましさを覚えたものだ。

切れ長の目は、この国の次期宰相に相応しいというべきか、鋭く、人によっては冷たいとさえ思われるのだとか。

冷たい美貌は、逆に数々の女性を虜にしているらしい。

頭脳明晰、冷静沈着との誉れ高いジン兄様は、私には少々・・・い

や、かなり度を越して甘い。
それでも自慢の兄様だ。

2番目の兄、齡21歳のカイルアス兄様——通称カイ兄様——は
茶色の髪を武人らしく短髪にしている。

王太子殿下の親衛隊副隊長を務めているカイ兄様は日々の鍛錬の賜
物か、ガツシリとした体つきをしている。

筋肉のついた体は、私が思いつきり体当たり（兄様曰く「抱きつき」
）しても、ビクともしない。

それでも威圧感を感じさせないのは、よく豪快に笑うから。気さく
な人柄で部下に慕われている。

もちろん服務中の時は一分の隙も見せないくらい、周囲に目を光ら
せているのだとか。加えて、訓練中は「鬼」の異名を持つ。

武術に秀で、服務中と服務外のそのギャップに悶えるという女性は
数多い。

そんなカイ兄様も、私にはとことん甘い。

私がそつと立ち上がるのに合わせ、二人も近付いてくる。私の傍ら
に控えていた侍女たちが、静々と頭を下げる。

この国で、知らぬ者はいないほどの、この兄弟。

兄弟そろって、次世代を担う重要地位についているのは、その大部分が本人達の才能・努力の成果であるが、そこに侯爵家という身分も加わる。

公爵に次ぐ貴族で、実力・地位・身分・美形・約束された将来とくれば色めき立たない女性はいないだろう。

未だに独身でいるのもそこに輪をかける。

その侯爵家に、その兄弟の下には「隠れ姫」がいる——という
のは、周知の事実だ。

「隠れ姫」の由来。

侯爵家の第三子に姫がいるという事実はある。

だが、ほとんどの貴族はその姿を見たことがない。

だからこその「隠れ姫」だ。

では、なぜ人の前に姿を見せない？

とんでもない醜女なのだろうか。

出歩けないほど病弱なのだろうか。

人前に出すのも恥ずかしいほどのはしたない姫なのだろうか。

人々は憶測する。

だがその事實は。

あまりの妹姫可愛さに、兄二人が隠してしまったからだとか。

貴族の子弟に目をつけられないように、

よからぬ男に攫われないように、

口クでもない男に騙されないように、

地位あるが故の嫉妬や妬みの悪意にさらされないように。

妹溺愛の成せる「隠れ姫」なのだ。

・
・
・
・
・
・
・
それが、この私、サラ、
齡15歳。

5年前から、「私」は「サラ」に、
なりました。

2（前書き）

「私」が、この世界に來た時のお話。

「つ．．．．」

元気がとりえだったはずの私は、珍しく風邪をひいて高熱を出していた。

入学したばかりの高校を1日休んで、ベットの上で息苦しさと戦っていた。

そう、私は池上沙羅^{いけがみ さら}。当時15歳だった。

「お．．．かあ、さ．．．」

母は、私が小学校5年生の時に亡くなった。

それ以来、父と二人暮らし。父は当然仕事へ行っているため、家には一人きりだった。

熱があつて苦しいこともあつてか、妙に心細く、亡くなって以来呼ぶこともなかった母を呼んだ。
『おかあさん』

苦しいよ・・・

助けて・・・

朦朧するまま、私は意識を失った。

額がひんやりとしたせいか、意識が浮上した。

だれ・・・？

うつすらと瞼を開けると、まだ頭がハッキリせず、頭がガンガン痛かった。

かすむ視界の中で、目に飛び込んできたのは金色と、茶色。そして、白。

「・・・ラ」

金色が動いた。おぼろげながら、それが人の髪の毛だと認識したけど、

どうして我が家に金髪の人がいるのか分からなかったし、考える余裕もなかった。

私の右手に、クッと微かな力が加えられた。

どうやら、誰かに握られているらしい。

「サラ」

今度は茶色が動いた。こちらもある人の頭だ。

顔はハッキリとは分からないけど、私の知り合いに金髪も茶髪もない。

でも、どうして私の名前を知っているの・・・？

人の部屋に入り込んで・・・。

視線を天井に向けると、

否、そこには天井はなかった。

見慣れたクリーム色の天井ではなく、白い、白いふんわりとした布が見えた。幾重にも重なっている。

ここは知らない、場所・・・？

そう考えると、背中に当たるベットの感触もいつもよりひどく柔らかだ。

ああ、これは夢だ。

熱にうなされて見ているに違いない。

夢の中でも熱を出してるなんて、私って変なの。

「サラ、兄様たちがついてるぞ」

「頑張るんだぞ、サラ」

大きな手に包み込まれている私の右手。

優しく撫でられている私の頭。

どこか心地よさを感じながら、私はまた目を閉じた。

今度目を覚ます時には、きっと父がいるに違いない、そう思ってた。

なのに、予想は裏切られた。

息苦しさかウソのようにスッキリした気分で目が覚めた私は、

またあの白い幾重にも重なった布とご対面する。

「え．．．．？」

ゆっくりと上半身を起こし、今自分がいる場所を確認する。

見慣れぬ大きなベット。軽くて暖かい、細やかな刺繍が施されている羽毛布団。

天蓋ベット．．．？

ベットの頭、足元、左部分は完全に柔らかな布が垂れ落ちている。

右だけが布を手繰り寄せて、ふんわりとベットの支柱にくくりつけてある。

そこから見えるのは、知らない部屋。

このベットもさることながら、この部屋もかなり大きい。品の良さそうな調度品の数々が視界に映る。

続いて私は自分を見下ろした。着た事もないような、可愛い、肌触りがよいネグリジェのようなもの。

ネグリジェの胸元を掴んでみて、そして気付いた。

「私、こんなに白かったっけ・・・」

寝ていたせいだろうか。寝間着から覗く手の色が、完全な黄色人種であるはずなのに、透き通るような白さになっていた。

それに、気のせいだろうか、手が小さくなったような気がするのは。

首を傾げると、視界に銀色が流れた。

何の気なしに、それを掴む。

「・・・え？」

掴んだのは、銀の髪の毛。

それを引っ張れば、私の頭皮も引っ張られた感触。

「ど、どついでにと・・・?」

胸下で整えられた、さらさらの銀髪。

まだ、夢を見ているのだろうか。さっきの続きだろうか。

でも金髪も茶髪の人もない。

混乱していると、ドアが開く音がした。その音に釣られて視線を上げれば、紺色の大人しいメイド服のようなものを着た20代半ばくらいの女性の姿が。

彼女はベットに近付き、そうして、その中で呆然としている私に気付いたのか

「っ！サラ様！お目覚めになられたのですね！」

と、みるみる涙を滲ませた。手にしていた水差しと薬のようなものが乗ったトレイがフルフルと震えている。

「サラ様、サラ様・・・ああ、ミリーはどれだけ心配したことか・・・
・ジルンアス様もカイルアス様もそれはサラ様のお傍を片時も離れないほどで。先ほど、サラ様の熱が少し下がったとお医者様が仰ったものですから、無理を言ってお二人には休んでいただいたところなんですよ。ああ、こうしてはいられないですね。すぐにお二人をお呼びしますね。きっとお喜びになりますよ」

ミリー、とは、彼女の名前だろうか。

こちらが何も言う暇を与えないくらいの弾丸トークに、呆気に取られた。

そうして、彼女はそのまま出て行ってしまった。

何、何だったの？

頭の整理が追いつかない。

どうしてあの人はメイドみたいな格好をしていたのだろう。
それに、あの人の髪。亜麻色だった。染めた感じはしない。

顔立ちが・・・そう、西洋人のようだった。

あの人はまた戻ってくるのだろうか。聞きたいことはたくさんある。でも、何を聞いていいのかわからない。とりあえず、これが夢という確証は欲しい。

そういえば、誰かを呼んでくると言っていなかったか？

そうこうしている内に、少し部屋の外が騒がしくなり、先ほどのミリーという女性が入りしていたドアが開き、

「「サラ！」」

と重なった声とともに、二人の男性が駆け寄ってきた。

この人たちだ・・・さつき、夢で見たのは。金髪の人と、茶髪の人。心なし、顔立ちが似ている。この二人も西洋人のような顔だ。

見たこともないような整った容貌に、ああ、やっぱりこれは夢なの

か、と思う。

それでも、私の名前を知っているのはやはり疑問だった。

「サラ、もう具合はいいのか？」

「どこか、気分が悪い所はないか？ああ、起き上がったりして、まだ横になっていたほうがいい」

金髪の人が、私の顔を覗き込み、頭を撫でる。

茶髪の人が、私の背中を支え、そつとベットに寝かせる。

抵抗する余裕もない私は、大人しくベットへ逆戻りした。

2（後書き）

長くなってしまったので、一旦きります。

3 (前書き)

過去の続き。

これは、夢なのかと聞きたかった。それなのになぜか酷く喉が渇き、上手く声が出ず訴えかけるように二人の男性を交互に見た。

二人とも20歳くらいだろうか、やけに心配そうな顔をして私を見ている。

「サラ、可哀相に。まだ頭がボーっとしているんだな」

茶髪の人がそういえば、金髪の人が

「無理もあるまい。サラは5日間も熱にうなされていたのだから」と答えた。

5日間・・・？

私は、そんなにも寝込んでいたのだろうか。

それに、今の言い方。まるで5日間も私の様子を見ていたようではないか。

ハッキリ聞こえる声。

ハッキリ分かる、私に触れる感触。

おかしい。夢にしては、リアルだ。

「サラ・・・？本当に大丈夫か？」

「やはりまだどこか痛むのか？侍医を呼ばせよう」

その言葉に、男性二人の後ろにひっそりと佇んでいたらしい先ほどのメイド服の女性が
出て行った。

これは、夢じゃないの・・・？

悪い予感に、ひどく不安になる。

「なぜ泣きそうな顔をしている？」

「どこか痛むところがあったら、兄様に何でも言いなさい」

「に、いさま・・・？」

二人を前に始めて出た声は、聞きなれない単語に対してのもの。

だって、『兄様』だなんて。私は一人っ子。兄という存在はいなかった。

兄はいないのに、男性がいった『兄』が、紛れもなく彼ら二人を指していることが分かったから。

私のかすれるような、小さな声を聞いて、二人の男性は初めて口角を上げた。

「サラ・・・やっと喋ってくれたな」

「お前のその可愛い声を聞かないと、安心できない」

親密そうに私の頬に触れるこの二人は一体誰なの・・・？

私は、一体どこへ来てしまったの・・・？

ううん、私は一体誰・・・？

「……は、ど………？」

やっと搾り出せた質問。

すぐに答えを返してくれると思っていたら、二人とも固まってしまった。

目を見開いて。信じられないとも言つかのように。

そうして、また先ほどまでの心配そうな表情に戻る。

「サラ？どうしたんだ？」

「わたし・・・は、沙羅」

「ああそうだ。お前はサラ。俺たちの可愛い妹だろ？」

妹。

私が、この人たちの？

「・・・ない。知ら、ない・・・」

頬に触れるその優しい手を振りほどき、私は頭を抱えた。

その後、私は侍医と呼ばれていた、初老の男性に診察された。

もちろん、私の不可解に見える態度についても。

そうして、「5日間も高熱にうなされていたことによる、一時的な

記憶障害」と診断された。

自分の名前は覚えているのだから、すぐに他のことも思い出すだろう、と。

違う。本当は違うのに。

15歳にもなって恥ずかしいことだが、その後しばらくは泣き喚いた。

泣き喚いた後は、部屋に引きこもり、誰も寄せ付けなかった。

ただただ信じられなかったから。

早く、早く父のところに戻りたかった。

鏡を見ることがイヤだった。

だって、私の姿とはまるっきり違っていたから。

客観的に冷静に見たなら「どこの美少女!？」というくらいの可憐な姿がそこにはあった。

それも、10歳の。

流れるような銀髪はさらさらと流れ、白い肌はキメ細やか。四肢はほっそりしていて、目はパッチリ。唇は小さく桜色。

だけど、嬉しくなかった。本来の私ではない姿に。

ミリーという女性は、私の専属侍女だと言われた。数人いる専属侍女をまとめる存在なのだそうだ。

私と仲が良く、ミリーを姉のように慕っていたらしい。

自暴自棄になっていた私にだって分かった。

彼女が、心の底から私を心配していることを。

そして、二人の「兄」も。

私がどんなに抵抗しても、彼らはずっと私を気遣ってくれた。

後で分かったことだが、当初20歳くらいと思っていた彼らは、

金髪のジルンアスが18歳、

茶髪のカイルアスは16歳だったらしい。

既にそれなりの要職に就いていたにも関わらず、休みをとってこの屋敷にいてくれた。

他でもない、私のために。サラのために。

早く、元気になってくれることを。

笑顔を見せてくれることを。

今までのことを思い出してくれることを。

いつものようなサラに戻ってくれることを。

ただ願って。

喚く私をギュッと抱きしめてくれた。

暴れた私の手が当たっても、離さないでいてくれた。

泣き叫ぶ私の頭をずっとなでてくれた。

部屋に閉じこもった私に、外からずっと話しかけてくれた。

優しく。優しく。

痛いほど、心に染みた。

私は、彼らの望む「サラ」じゃないのに。

妹だと信じて、無償に愛をくれた。

だから、

だから。

私は決めた。

沙羅から、サラになることを。

二人の、兄様の妹になることを。

だって、嬉しかった。

心底心配してくれたこと。優しかったこと。

泣きたくなくなるくらい、それが幸せなことだって気付いたの。

元の日本に戻れないなら、変わるのは私しかない。
泣いたって何も変わらない。

ここがどこで、トリップ？したのかとか、どうやってしたのかとか
考えたって仕方ない。

1週間引き籠もった部屋のドアを開けて、初めて自室から出た時。
廊下にいた二人の兄を見た時。

「兄様」

つて、自然に笑顔になった。

その時の二人の泣きそうな笑顔は、きつと一生忘れない。

3 (後書き)

これで一区切りです。シリアスっぽい場面はこれで終わります。

4（前書き）

誤字脱字、矛盾点等ございましたらご指摘ください。

「そつえばサラ、髪下ろしたのか？」

ジン兄様が、背中の中ほどで切りそろえた私の銀髪を撫でながら聞く。

10歳の時はともかく、15歳となった今でも変わらずに撫でてく
るのが恥ずかしいような照れくさいような・・・。
でもイヤじゃない。

「さつき、鳥が・・・」

「鳥？」

「ふふつ。きつとサラ様と遊びたかったのですわ。鳥がりボンを抜き取って行ってしまいましたの」

私の代わりにミリーが答える。

そつ。色とりどりの花が咲く、この侯爵家の庭でお散歩をしていたら、どこからか小鳥が飛んできて、

シュルつという音と共に、髪の毛を結わえてあったらリボンが鳥のくちばしに啜えられ、そのままスルスルとほどけてしまったのだ。

「そのまま、どこかへ行ってしまったの」

お気に入りの白いレースがあしらわれたピンクのリボンだっただけに、少ししょんぼりして言う。

「リボンくらい、兄様が買ってやるさ」

カイ兄様が言う。続いて「100本でも200本でも・・・」と言ったのは、聞かなかったことにしておこう。

カイ兄様は、何事も豪快だ。
リボン200本で一体どうしろというのだ。

「さあ、サラ。お茶にしようか。一緒にいられる時間は限られているんだから、兄様たちとお話しよう」

そう、今日は久しぶりに兄様たちが侯爵家へ帰ってきのだ。

いつもは次期宰相、王太子親衛隊副隊長という肩書きを持つ2人だけに、職務に明け暮れ、普段はお城に籠りつきりだ。

執務に追われて忙しいはずなのに、こうやって少しの時間を見つけ
ては侯爵家へ帰ってきてくれる。

そう、だから私はお茶の時間にテーブルを飾る花を摘みに庭に降り
てきたのだ。

摘み終わった花束を、ミリーへと手渡す。きっと綺麗に生けてく
るだろう。

その過程を見ていたジン兄様が首を傾げる。

「花？」

「ええ、お茶する時に飾ろうと思って」

照れたように言う私を、二人の兄様はそれはそれは愛おしそうな目で見る。

「サラ自ら摘んでくれたのか。嬉しいな」

「なんって可愛いんだ！サラ！」

そのまま、私はカイ兄様にギューっと抱き潰される。

もちろん本人は加減しているのだろうが、何せこの華奢なサラの体は見た目同様、頑丈には出来ているはずもない。

何度窒息死しそうになったことか・・・。

「カイ、やめろ。サラが潰れる」

そうしていつもの如く、ジン兄様の少し冷たい声で、やっと逃げ出せるのだ。

思うのだけれど、ジン兄様は無敵だ。

だって、この国でトップクラスの武力を誇る（ミリー曰く）カイ兄様が、

ジン兄様の言葉には逆らわない・・・逆らえないから。

侯爵家当主である父様だって、たまに「ジンは・・・敵に回すと恐ろしい」ってばやいているのを聞いたことがある。

兄様ったら、父様に何かししてるのかしら？

でも、私に向けては決して冷たい表情も、冷たい声も出さないの。いつも優しい目をしてくれる。

年々、次期宰相としてお仕事が多くなっているから会う機会は減ってしまっただけで、悲しいけれど

前と変わらず微笑んで、触れてくれる。

両隣に兄様、後ろに侍女たちを伴ってサロンに移動する間、そつと兄様たちを見上げる。
背の高い二人。凛々しい姿。

あれから5年。本当の兄のように慕うようになった。

・・・ううん。

もう、本当の兄様。

そして私は、侯爵家の一人娘。

「サラ」としての記憶がない私は、この5年でマナーやこの国について必死で勉強した。

覚えていない（というか、知らない）ことは、高熱のせいにされたため、特に不思議がられなかった。

広大なこの屋敷も、迷子にならなかったのは、ひとえに、常に侍女の誰かを伴っているから。

父は侯爵家ながら、穏やかな性格で、権力を渴望するような醜い野心のない家族を愛する人だ。

母は美しく聡明で、陰日なたから父を支えている。

貴族にしては珍しく恋愛結婚のせいか、両親は仲が良い。

日本の、父のことを考えない日はないけれど、父のことが心配で押しつぶされそうにもなるけれど

でも、私はここに来て幸せなんじゃないかって。

幸運なんじゃないかって。

優しい両親と、優しい2人の兄。

最高の、家族。

「兄様、大好きだよ」

そっと両手でそれぞれの手をキュッと握る。

途端に降ってくる、甘い言葉。

「兄様も、サラのことが大好きだよ」

「何よりも、サラが大切だ。兄様が守ってやるからな」

じゃあ、私のあのお願い、聞いてくれるかな。

5（前書き）

お気に入り登録が200件越えてました。嬉しすぎて泣きそうです。
ありがとうございます。

「隠れ姫」だなんて呼ばれていることを知ったのは、実はつい先日のことだ。

我が侯爵家に、お客様がやってきたのだ。

父や同じく貴族出身の母の友人や知人、仕事関係の人がやって来ることは特別珍しくもない。

その時は事前に知らされているのだが、

「自室から出ないように」

とか

「庭へ下りないように」

とか

「サロンへ来ないように」

等、必ず言われていた。

私にだって分かる。私がお客様の邪魔にならないようにしているのだってこと。きっと大切なお話をされているのだから。

その言いつけは疑問に思うことなく守っていた。

だがその日。

たまたま、約束の時間より少しだけ、お客様が来るのが早かった。

まだいらっしゃってないだろう、と思って油断していた私は、お客様用の控えの間付近を歩いていたのだ。

そうして、聞こえてしまった。私の名誉のために言うておく。断じて、立ち聞きしたわけではない。

応対していた父に向かってだろう、父と同年輩くらいの男性が

「隠れ姫は今日もかくれんぼか？」

と言っているのを。

少しからかい笑いを含んだ声音で。

最初は、何かの当て言葉かと思っていた。
もしくは、何かの暗号か。

「『隠れ姫』だって有名だぞ。お前の愛娘は。隠されれば隠されるほど、見たくなるのが人の性さ」

娘……

私のことを言われていると知って心臓がドキドキした。

「いや、ジルとカイがな…… 渋るんだ」

対しての父の答え。

兄様たち？ 兄様が何？ 何を渋るの？

もつと聞きたかったけど、後ろに控えていたミリーが

「サラ様」

と静かに、だけれども少し焦ったように、せつつくように呼びかけてきたので

はしたない事をしてしまった、とすぐにその場を離れて自室へ戻った。

気になって仕方がなく、ミリーに「隠れ姫」とは何のことか聞いてみたけれど

あまりにもしどろもどろになっているので申し訳なくなつて、詳しく聞きだすことは叶わなかった。

ミリーはウソをつくのが苦手なのだ。

だから自分なりに調べてみた。

家庭教師にさりげなく聞いたり。

今までは「サラ」になるために必死で考えもつかなかったけど。

貴族のことは未だによく分からないが、この国での貴族の子女は定期的に集まったり

社交界デビュー前にも宮廷での催しに参加したりしているらしい。

そこは人脈をつなげる大切な場。

将来国を担う要として、その年代から人脈を作るのだ。

何も子息に限ったことではない。

令嬢とて、そこには「女社会」がある。

それならば。

私はどうして行かされないのか。

聞かれたこともないのはさすがにおかしい。

私はまだ人前に出せるほど立派じゃないのか。

ミリーたちがいてつまらなくはないけれど。

そろそろ友達とか作っておいたほうがいいんじゃないの？というか
10歳までのサラはどうしていたのだろうか。

それに・・・

社交界デビューは16歳だ。

私には、あと1年しかない。

マナーだって頑張って勉強してきた。

日本にいた頃も、人付き合いは得意な方だった。

それでも、父や兄たちにとっては私はまだまだなのだろうか。

不十分なのだろうか。

漠然と、侯爵家のつながりのために、さらなる発展のためにいずれ
はどこかへ嫁ぐのだと思っている。

貴族社会で父様や母様みたいな恋愛結婚は珍しいことも知っている。

今まで可愛がってくれた分、私にできるお礼ならなんでもするつもりだ。

だから、次に兄様たちが帰ってきたら、「お願い」をしようと決心していた。

「ねえ、兄様？」

よい香りがたつ紅茶と、色とりどりのお菓子を囲みながら、私は首を傾げる。

「何だ？」

「あのね、お願いがあるの」

「サラが私たちに願い？珍しいこともあるものだ。何でも言ってみなさい」

「俺たちを頼ってくれるなんて嬉しいぞ」

兄様たちは揃って身を乗り出してくる。

その表情はいかにも嬉しそうで。

そういえば、こうしてお願い事することってあんまりなかったかな、と思う。

だって、大抵は欲しいと思うものは持っていたし、私の表情に目ざとい兄様たちは、すぐさま「これが欲しいんだろ？」と与えてくれてたから。

でもね。

今回はモノじゃないの。欲しいものは。

「私、外に出たい」

ものの見事に固まった兄様と．．．なぜか侍女たち。

6（前書き）

あまりのお気に入りの多さに、恐縮しきりです。

「外に出たい」

私のこのたった一言なのに、たっぷりの時間、兄様たちは固まっていた。

私はそれを辛抱強く待つ。

兄様たちが私を表に出さないようにしていることは、父の話（盗み聞きだけど・・）から分かっていたから
兄様たちのこの反応も予想していた。

ようやく我に返ったのだろう、

「ど、どどどうしたんだサラ！？なぜそんなことを！？」

カイ兄様がいっきりどもりながら慌てふためいた。

「サラ、突然どうしたんだ？誰かに何か言われたのか？」

さすが次期宰相というべきか、ジン兄様は驚きを封じ込め、冷静に切り出した。

「いいえ、誰にも何も言われてないわ」

「ならなぜ？」

「だって、私はもう15歳よ。あと1年で社交界デビューするわ。それなのに、未だに屋敷に閉じこもってばかりで、外の世界を知らないの。この家の人たちとしか接してない」

「お前の言う通りだ、サラ。あと1年たてば社交界デビューする。それが、外に出るきっかけになるだろう？だからまだそんなことをする段階じゃない」

「いいえ、兄様。私、知ってるのよ。私くらいの年齢の子は皆、時々お城に集まったりしてるって。お互いの家の行き来もしているって」

私が話した途端、ジン兄様は部屋の隅に控えている侍女たちに視線

をやった。

それは少し厳しいもので。

「違うわ、彼女たちからは何も聞いてない。本当よ。……自分で調べたの」

慌てて私はジン兄様の視界に入り込む。

まるで、「お前たちが余計なことを吹き込んだのか」とでも言いたそうな目線だったから。

ジン兄様は少し考える素振りをした後、横に座っていた私を、ジン兄様のほうへ向かせた。

そうして膝に置いていた私の両手を、ジン兄様の両手でそっと持ち上げられる。

「いいか、サラ。慌てる必要はないんだ。今は、この家でゆっくり穏やかに暮らしていればいい」

「……でも私、同年代の友達が欲しいの」

ポツリと呟いた言葉に、ジン兄様が悲しそうに少し眉根を寄せた。

「サラ、遊び相手が欲しいなら、俺がなってやるぞ」

ジン兄様とは反対の隣から、カイ兄様が元気に言った。

気持ち嬉しいけれど・・・

「カイ兄様はお友達ではなく、兄様よ。女の子でもないし・・・」

大きい兄様に抱っこされると、普段とは違って高い視線になって楽しいけれど、

一緒になって遊ぶのとはちょっと違う気がした。

女の子同士で恋の話とか、秘密の話とか・・・。日本で同学年の友達としていたようなことがしたいのだ。

一般人と貴族は違うかもしれないけれど。

「サラ、お前には、まだまだやることあるんじゃないのか？」

自分に注意を引くようにか、ジン兄様が少し私の手を引いた。

兄様を見上げれば、まっすぐに私の目を見下ろしてくる。
相変わらずのその整った顔立ちに見惚れてしまいそうになる。

「やることって?」

「お前は、一度記憶を少しなくしただろ? マナーもこの国のことも、
また一から勉強していた」

5年前、私がここに来た時のことだ。

それを言われると、私は少し悲しくなる。ずっと無我夢中だったから。

決して忘れる事のない日本の父のことを思い出しては、夜中に一人
ベットで泣いたこともあった。

貴族のマナーのことなんて分からなくて、難しくて。

それでも、兄様たちの妹になるために、侯爵家の娘になるために必
死で頭に詰め込んだ。

何度も何度も練習した。

本当は泣きたい時も、喚きたい時もあつたけど、それは「貴族の娘」
としてはできないことだったから。
耐えてきた。

「兄様たちは・・・どうして、反対するの？」

「反対なんかしてないさ」

「うそ！私を、この家から出さないようにしているんだわ」

みるみるうちに涙が溢れてきた。決して責めたいわけじゃないのに。
今までも十分楽しくやってきてこれたのに。兄様たちのお陰で。

自分の中で、何かが溢れそうになっていたのだろうか。

「サラ・・・サラ、泣かないでくれ」

ジン兄様が、そつと私の眦に親指を滑らせる。まるで壊れ物でも扱
うかのような、繊細な指の動きだった。

「サラ、泣いているのか？」

カイ兄様もビックリして、私の背中に手を置く。

優しくしないで。優しくすると、余計に涙が出てくるから。

「兄様は、私がまだ人前に出せるような立派な子じゃないって思っているのね」

たった5年だけの、出来損ないの貴族の娘か。

「違う！違うぞ、サラ、それは」

「じゃあ、どうして？兄様たちが、私が外に出るのを反対しているのでしょうか？私っ……一杯勉強してきたつもりだわ。確かに・・・確かに、まだまだかもしれないけれど・・・！」

兄様の言葉を遮って、ついでにその手も振り払ってしまった。

座っていたソファから立ち上がり、手を宙に浮かせたままのジン兄様と、突然の私にビックリした表情をしているカイ兄様に向き直る。

「兄様たちにとって、私は恥ずかしい存在なんだわ。人前に出すのも躊躇うほどに！」

涙で滲んで、兄様の顔は見れなかった。

そのまま、私は部屋から駆け出た。

6（後書き）

サウちゃん、暴走してしまいました・・・こんな予定では・・・。

7（前書き）

サラが飛び出した後の兄二人。

「なんということだ・・・！」

ジルンアスは頭を抱えた。

常に冷静沈着で、時として冷たささえ感じる侯爵家長男のその普段は決して見ないような慌てた様子に、

長年この侯爵家に遣える侍女たちは驚きを隠せなかった。

それでも、それと分かるような素振りを見せるような彼女たちではなかったが。

だが彼女たちは知っていた。

ジルンアスも、カイルアスも、何ものにも変えがたいくらいに、妹姫——サラを可愛がっていることを。慈しんでいることを。

自分にも他人にも厳しいジルンアス。

たとえそれが自分の父、つまり侯爵家当主であっても、言い負かす

ことはざらにある。

まだ小さい時からその聡明さは群を抜いていて、将来国を担う中枢として、何かしらの補佐をするであろうことは

この国の貴族の間では当然のこととして受け止められていた。

事実、若干23歳にして次期宰相という地位にいるわけだが・・・

ジルンアスの城勤めが決まった際、こんな不確定な噂が、侯爵家に仕える者たちの間でまことしやかにささやかれた。

それは、ジルンアスが言ったとされる言葉だ。

『宰相の地位？別にそんなもの欲しくもない。地位や権力に固執する者はただの愚か者だ。そんなもの、得たところでもろく崩れ去る代物だ。私個人としての意見ならば、この国の行く末になど興味もない。たかが、人生生きても80までだ。なぜその限られた中で、自分が死んだ後のことなど考えねばならないのだ。・・・ああ、そうさ。サラがいるからだ。サラが生きている間だけでも、この国に住みよい国にせねばならないのだ。だから宰相になったに過ぎぬ。うまくいけば王を操れるしな。貴族会に入るには時間がかかるし、他の狡猾な老いぼれと言い合うのも時間の無駄だ』

絶対に、他家や、ましてや王族には聞かれてはならないその噂。
忠誠溢れるこの侯爵家の使用人の間にしか流れていないが、
これを聞いた時、皆思ったものだ。

『……ジルンアス様なら、言いかねない』
と。

そうして、この噂の続きにはまだある。

『何を好き好んで、この侯爵家を出て王城に缶詰にならねばならぬ
のだ……。私だって、サラと一緒にいたいものを』

見目麗しいジルンアス。

冷たすぎると称されるほどの、その整った容貌。

だが、サラの前では柔らかく変化する。

本来なら休暇が取れるはずもなかるうに、どうやって取ったのかその手段を想像するだけで恐ろしいが、

貴重な休暇には必ず侯爵家へ帰ってくる。

いや、侯爵家へ帰ってくるために休暇をもぎ取るのだ。

古くの友人である、王太子殿下は事情を知っているのだろうか。

まさか、王太子殿下を脅しているわけではあるまい……。

最初の頃は、使用人たちはそう不安に思ったものだ。

「兄さん……サラ、泣いて……」

カイルアスは未だ呆然として、サラが出て行った扉を凝視している。信じられない、とてもいうように、手が小刻みに震えて。普段は凛々しい、親衛隊の軍人であるだけに、やはり侍女たちも少し心配になる。

彼も、兄に負けず劣らず、サラ命だ。

カイルアスが軍人になったのは言うまでもない。

『俺が、強くなってサラを守るんだ!!』

と宣言したからだ。

・・・屋敷中に響く大声で。

その際に、まだ産まれてまもないサラが、スヤスヤと寝ていた所を起されて、ピギヤピギヤ泣き出してしまい、その原因を作ったカイルアスがジルンアスに一発殴られた、ということ周知の事実だ。

カイルアスはその幼い頃の宣言どおり、めきめき力をつけ、今では狭き門であるの王太子の親衛隊に入隊したばかりか

副隊長にまで上り詰めた。

彼の武力は国内外ではちょっとした有名になっているらしい。

『カイは、一体何になりたいんだ・・・』

と、日々筋肉がついていく息子を見て、当時侯爵家当主は頭をかかえたとか。

そんな兄二人に愛される妹姫。

可愛さゆえに、侯爵家から出さなかった。

本人は無自覚のようだが、類稀なる美しさを持っているサラ。

今ではまだ「可愛い」と称されるが、もういくばくも経てば女としての香がたつだろう。

そして純粹で、心根の優しいサラ。

危険から守りたいと思うのは、何も兄二人だけではない。

侯爵家の使用人全てが、サラを守りたいと思っていた。守らねばならぬと。

だから、侍女たちも、サラが侯爵家から出されないワケを知っていたのだ。

そうする兄を微笑ましく思っていた。
美しい兄妹愛だと。

それなのに、まさか泣かせることになろうとは。

7（後書き）

私の中では、カイはムキムキマッチョではないんです。書き方がどうしてもそんな感じになってしまいましたか……。ガタイのいいお兄ちゃんです。

「サラ様！サラ様、お待ちください！」

兄たちとお茶の最中に飛び出していったサラを追いかけたのは、もちろんミリーだ。

ミリーには何よりもまず、サラを優先させるように命じられている。

それが、この侯爵家に雇われた時の条件だった。

『有事の際には、当主や奥方、嫡男や次男を気にかける必要はない。ただ一番にサラのみを助けること』

侍女たちの中でも、サラと一番親しく、一番一緒にいる時間が長いミリー。

これは彼女のみに言われた命令だ。

だが、まるで精巧な人形のようなサラを、心の美しいサラを、たとえその命令がなくなってもミリーはサラを一番に大切に思っていた。

現在25歳のミリーはちょうど10歳下のサラを妹のように感じてもいた。

「サラ様・・・」

自室に飛び込み、すぐさまソファにうずくまった小さな主人を見て

心が痛んだ。

ああ、きつと泣いていらっしやる。

普段は泣きたいことがあっても、ぐっと堪えているサラ様が。

ミリーはいてもたってもいられなく、その震える小さな背中にそつと自身の手を置いた。

「ミリー……」

涙声で、サラはそつと呟いた。

「はい、何でございましょう?」

ミリーは優しく聞き返す。

「兄様たちに、ひどいことを言ってしまったかしら……」

この優しい方は、いつも先に他人を気遣う。

自身が悲しくて泣いているにも関わらず、だ。

（サラ様は、優しすぎるわ）

思い出す5年前。

高熱を出して寝込んでしまった時。やっと意識を取り戻したと思ったら、少し様子が変で。

取り乱していた彼女の様子は未だに覚えている。

だがそれもひと時で。

それから付き物が落ちたように素直に、従順になった。

そこまでする必要もないくらいに、他者に気を遣うようになった。

まだたった10歳だったというのに。

いろいろなことに我慢をしていることが傍から見ても分かった。

なぜそんなに我慢をするのか、ミリーには不明で、それでもサラが頼ってきてくれないことに、泣きついてくれないことに少しの寂しさもあつたのだ。

「大丈夫でございますよ、サラ様」

そう、何も心配する必要はないのだ。

サラはそつと顔を上げて、微笑むミリーを見つめる。

「・・・本当？」

顔を上げたサラは、先ほどの行いに傷ついた顔をしている。

そんな顔をする必要もない。

「ええ、本当ですとも」

「兄様、私のこと嫌いになったりしてない・・・？」

「そんなこと、有り得ませんわ。このミリーが保障いたします」

天地がひっくり返っても有り得ない。

あの妹溺愛の兄二人が、サラを嫌いになるなんて。

むしろ、サラがそんな風に思っていたと知った彼らのほうがひっくり返るだろう。

驚きで。

「サラ様。大丈夫でございますよ。ジルンアス様も、カイルアス様もサラ様のことが愛おしくて溜まらないんですわ。きっと、サラ様
のお願い事も理解して下さいますよ」

ミリーとて、実はジルンアスとカイルアスの意見には賛成だったのだ。

サラを侯爵家から出さないこと。

ミリーは元々没落貴族出身だ。

今はもうない低い爵位をкаろうじて持っているだけだったが、それでも貴族同士の付き合いはあった。

そこで、イヤになるほど見てきたのだ。

貴族同士の醜い争いを。

何も目に見えるものじゃない。

陰での蹴落とし、本人がいない所での悪口。

大人だけじゃない。

まだ社交界デビューもしてない、成人してない子女も同様だった。派閥さえある。

なまじ貴族というプライドがあるために、少しでも他者より優位に立とうとする。

全てがそういう人ばかりではなく、純粹に友人同士という間柄もいたのだが、ミリーは辟易したものだ。

だから、その中にサラという純真な存在を投入することは、躊躇われる。

どうなってしまうか想像もできないことが怖いのだ。

ジルンアスとカイルアスの想いが痛いほどよく分かる。

ジルンアスはその明晰さで、他の貴族——特にその座を妬む嫡子の思念も思惑も上手くかわしてきたし、何か言われようものなら、冷徹ともいえる言葉で完膚なきままに叩き伏せてきた。

カイルアスは最初から軍人志望だったのだが、親衛隊という特に身分も関係してくる役職に就いてからは、七光りだの言われたりしたが、文字通り武術でもって有無を言わせることはなかった。それに裏表のない生粋の豪快な性格でもってして、慕われるほうが多かった。

だから当主も奥方も、そういう点では息子たちに特別な心配はしていなかった。

だが、サラの気持ちも痛いほどよく分かった。

むしろ、今まで言わなかったことのほうが驚きなくらいだ。

その歳になれば、親しい友人がほしいだろう。

侯爵家では、年上の、しかも自分に傳く人たちばかりに囲まれて過
ごしてきたから。

だから、ミリーはサラにアドバイスをした。

あの兄二人に、サラの願いを聞くように仕向ける、アドバイスを。

8（後書き）

思つように話が進みません・・・。
お読みいただきありがとうございます。

9 (前書き)

今さらですが、ジンの一人称は「私」。カイの一人称は「俺」です。

ノックの音に、ミリーは素早く立ち上がり、まずはサラの衣装を整えた。

泣いていたため目の淵がほんのり赤いので、何か冷やすものかと思っていると、

今度はまたせわしくノックがした。

だが、ミリーの仕事はサラのために。

ミリーは部屋つきの侍女に目配せし、誰何してもらった。

予想通り、現れたのはジルンアスとカイルアスであった。

ジルンアスはいつも通り、涼やかな、少し厳しい表情で。

カイルアスは傍目にも分かるくらい悲壮感に溢れていた。

「サラ・・・」

扉が開いた瞬間から、サラは兄二人の存在にもちろん気付いていた。だが、さっきの今だったため、咄嗟にどうゆう反応をしていたのか
逡巡し、

しかし次にはスカートを少し両手でつまみ上げ、淑女の礼を立派に
してみた。

礼が終わるや否や、サラは二人に近付き

「兄様・・・あの、先ほどはごめんなさい」

と謝った。

「私、わがママを言って兄様たちを困らせてしまったわ。お忙しい中、せつかく帰ってきてくれたのに……」

自分の子供じみた態度をひたすら恥かしく思い、羞恥心で頬を赤らめた。

そんな表情も、兄二人にとっては「可愛い」としか思えないが。

「サラ、こちらこそすまなかった。カイと少し話したのだが、誤解があるようだ……。私たちは、何もサラのことを恥ずかしいなんて思ったことはない」

「そうだぞ、サラ。お前は、どこに出しても安心なくらい、立派なレディだ」

「……じゃあ、どうして、私を他の貴族の方たちのように、宮廷の行事に参加させてくれたりしないの？ 私も言わなかったから悪いのだけど、外に出させてくれなかったの？」

サラは少しだけ不安になっていた。

日本にいる頃は、女子はたいていグループを作っていたからだ。

今の心境は、新学期早々学校を休んでしまい、やっと登校できた時には既にグループができていて・・・というものだ。

サラと同じくらいの年齢の女の子たちも、きっともうお友達がいるだろう。

今さら、自分にも親しくしてくれる友人が現れるのか。

「それは兄様の勝手な判断だった。まだ人前に出しくなかつたのは・・・」

ジンが言いよどむ。

よっぽど言いにくいことなのだろうか。

やはり自分に問題があつたのだろうか、優しい兄様たちはそれを言い出せずにいるのだろうか。サラは再び気持ちが沈んだ。

「サラ、俺たちはあまりのお前可愛さ故に、他の奴らにとられなくなかつたんだ」

「え？」

軍人らしくハッキリと言いきったのは、もちろんカイだった。

思いも寄らぬ返答に、サラの目は点になる。

「だってな……サラのその容姿。男だったら思わず搔っ攫いたくなるというか……」

「カイ!!!」

「うつ……」

冗談にもならないことを言うカイルアスに、ジルンアスが続きを塞ぐ。

相変わらず、兄の一言に黙る弟。

「はあ。……サラ、この屋敷にいれば、少なくとも外からは守ら

れている。だが、お前自身が外に出てしまったらと思うと、私たちは怖かったんだ。私もカイも、執務故にお前を四六時中守ってやることは難しい。だから」

だから、外に出したくなかったのだ、と。

サラは最初、何を冗談を言っているのかと思った。

そんなのが理由になるなんて信じられなかった。

だが、兄たちの様子は、冗談を言ってる雰囲気ではなくて。

「シスコン・・・」

ポソッと呟いたサラ。

普通の兄妹にしては、やけに可愛がってくれるとはずっと思っていた。

もしかしたら、これは貴族には、この世界には普通なのかもしれないとも。

でもそれが嬉しかったから、今までは有りがたく受け止めていた。

だが、こんなに行き過ぎていたとは……。

時代が時代で、世界が世界だったら軟禁ではないか、とは口が裂けても言えない。

と、もう一人の自分が別視点で冷静に考えていなければ、兄たちを揶揄していなければならぬほど、

サラは泣くのを耐えることに必死だった。

（ああ、なんて……）

やはり何て自分は幸せ者なんだろうか。

これほどまでにサラのことを心配してくれることが。

5年前から既に知っていたことだけれど。成長しても褪せることなくサラを大切に思ってくれている。

このまま、兄たちに心配をかけないように、望みどおりに侯爵家から出ずに過ごそうか。

一瞬だけ頭をよぎった思い。

（——ううん、それじゃダメ）

貴族の娘として生まれ変わったからには、自分には自分の役目がある。

恩がある。

「兄様」

サラはそつと兄たちに近付いた。

身長差で、自然と兄を見上げる格好になる。

泣くのを堪えていたせいもあつてか、目はウルウルしている。

「兄様、私、寂しかったの」

「「サラ？」」

「兄様たち、ほとんどこの家に居なくなつてしまつて・・・」

少し視線を落とす。

そうすれば、よりサラの悲しみが二人に伝わった。

「兄様が、どんなところでお仕事しているのか知りたいわ。兄様たちが作る、この国を知りたいわ。自分の目で」

そうして、再び兄たちの眼を見る。

サラの目にもハッキリと分かるほど、彼らの視線はサラを見つめたまま揺れていた。

（もう一息かしら・・・）

「もっと、兄様たちのことを知りたいの。・・・だめ？」

首を少し傾げる。銀の髪が、サラサラと肩をなでた。

「つく・・・！」

「お、おおおお」

ジルンアスは何かに必死で耐えるように唇をかみ締め、
カイルアスは体が震えている。

「・・・お願い、兄様」

この一言でもってして、兄二人は陥落した。
元より陥落していたも同然だが。

首肯した二人に、サラは思いつきり抱きついた。

「ありがとう！！ジン兄様、カイ兄様、大好き！！」

少し離れたところでその様子をじっと見守っていたミリーが、

心の中で

（サラ様！さすがですわ！）

と、ぐっと親指を立てたことは誰も知らない。

9（後書き）

「こうすれば二人を落とせますわよ」と、ミリーにアドバイスされていたサラちゃん。

10（前書き）

やっと両親登場。名前迷いました・・・
サラ視点です。

「ああ、サラ、サラ。本当に良かったな」

そう言っ て私を抱きしめてくれたのは、父親でオイレンブルク侯爵
家当主だ。

心なし、目が潤んでいるのは・・・気のせいだろうか。

あれからトントン拍子に話が進み、1ヵ月後に宮廷で行われる、貴
族子女を対象としたパーティーに参加することになったのだ。

今は父母と夕食後のお茶を楽しみながら、その報告をしている。

ちなみにジン兄様とカイ兄様はすでに宮殿にお戻りだ。

オイレンブルク領は幸いにも、宮廷領とそんなに離れていない。
カイ兄様が愛馬をすっ飛ばしてくれば2時間ほどで着く距離だ。

「本当に。ですが、くれぐれも気をつけるのですよ。ああ、本来ならもっと早くに耐性をつけておかねばならなかったものを……。本当にあの子たちったら」

母様が言う『あの子たち』とは、兄様二人のことで間違いないだろう。

かたや次期宰相、かたや親衛隊副隊長にまでなった兄様のことを『あの子』って言えるところが……母様らしいというか。

三児の母親とは見えないほど、肌もつややかで金色の髪も豊かに波打っている。

母様のように頭の回転が早く、聡ければ、きっと貴族の方たちの中にいても問題なく過ごせるのになあ……と思う。

「それにしても、よくあの子たちが許してくれたわね？」

母様の言葉に、父様も身を乗り出す。

「ああそうだ。今までどんなにジンやカイに促してみても、首を縦に振らなかったというのに……」

「あら、あなたの場合、ジンに逆に言い負かされて最終的にはいつも納得されていていますよ」

母様がからかうように笑うと、父様はバツの悪そうな顔をした。

「あいつはどうしてか、昔からよく口が回るといつか、相手の弱点を見抜いて痛いところを突く力があるというか・・・」

父様、それって決して誉められた特技じゃないような・・・。
それに、弱点？父様は何か弱点を握られているのかしら。

ジン兄様、実の親にまでこう思われているって、よっぽどのね。

「それで？サラ。一体どうやってあの二人を納得させたの？」

「特別なことはしてないわ。ただ、お願いをしただけ」

両親には割愛してしまったが、『お願い』の前にいろいろあった・・・。

もう思い出さないようにしよう。私が恥ずかしいだけだから。

「お願い？・・・『お願い』ねえ・・・」

父様はまだぶつぶつ言ってる。

「あなたがあの子たちに『お願い』しても、無理よ」

母様がバツサリ切り捨てる。

母様・・・強いわ。

こうやって仲の良い(?) 両親を見ているのが好きだ。

それに、母という存在がまた出来た。

沙羅としての生みの親はもう亡くなってしまったから、余計に嬉しかった。

「さあ、そうと決まれば、ドレスを選ぶわよ!」

のほほんと両親のやり取りを見ながらお茶を飲んでいたら、母様が勇ましく立ち上がった。

「え? 母様?」

「どうしたんだ、お前、急に・・・」

父様も突然の母様にビックリしている。

「あらだつて、今までサラのお出かけがなかったものですから、娘を着飾る機会がほとんどなかったのよ！これぞ母親の醍醐味！美しい娘の晴れの日を完璧にして送り出すのよ！こんな日が来ることをどれほど楽しみにしていたことか・・・。ああ、わたくしったら楽しくなつてまいりましたわ。俄然やる気が湧いてくるというものです！さあ、ミリー！腕の見せ所ですわよ！」

「はい！奥様！！」

母様の熱弁に呆気にとられている私とは対照的に、部屋の隅にひかえていたミリーは即座に反応した。

ミリーもなぜそんな気合が入っているの・・・。

「あの、母様、あと一ヶ月も先のことから・・・」

「何を言っているの。一ヶ月なんてあつという間よ。サラ、いい？

女性にはそれはそれは準備が必要なもののよ」

「そうですか・・・」

どうしよう、この迫力に何も言い返せない。

父様を見れば、なにやら暖かい眼差しで母様を見ているし。まるで『良かったな、お前』とでも言っているかのようだ。

私の視線に気付いたのか、父様は私を見つめる。

「サラ、楽しんでくるんだよ」

ああ、『粗相のないように』とか『貴族令嬢としてのマナー』云々言う事もなく、

ただ私が楽しむことだけを考えて声をかけてくれる父様。

「はい」

だから私も微笑んで返事を返す。

「今から仕立て屋を呼ぶとして・・・間に合うかしら」

「奥様、アクセサリーはいかがいたしましょう」

「ドレスに合う、品の良いものを選びたいわ」

「それではさっそくいくつか手配させます」

母様とミリーは既に相談しあっている。

そんな二人を見つつ、父様とこっそり笑みを交わす。

かくして、一ヶ月は怒濤のように過ぎたのだった。

10（後書き）

サウちゃん、いよいよ出発です。

11（前書き）

いまいち機能を使いこなせていないような・・・。感想くださった方、ありがとうございます。飛び上がって喜んでいます。

木・・・花・・・

人・・・街・・・

「サラ様？ご気分でも悪いのですか？」

ミリーの気遣わしげな声に、私は馬車の窓からカーテンに隠れるように外を眺めていた体勢から、

馬車の中へと意識を戻す。

オイレンブルク侯爵の紋章があしらわれた豪華な馬車は、王宮に向けて街道を走っている。

当然、アスファルトなんかで塗装されていない道は、直にガタゴトと馬車を揺らす

体に負担がかからないようにとしきつめられた柔らかなクッションのお陰でそれほど揺れは感じずに済んでいた。

1刻ほど前、初めて屋敷の敷地内から外に出た。

感慨深いものを感じながら、やっと出れた、という思いと、とうとう出てしまった、という思いがごちゃまぜになった。

馬車が見えなくなるまで、わざわざ玄関先から見送ってくれた両親。

王宮への付き添いは、もちろん気心の知れたミリーだ。

母様とミリー渾身の、ドレスや髪飾りやアクセサリーなどの荷物を大事そうに積み込んでくれた。

屋敷から着飾っていくのではなく、あちらで用意されている部屋で着付けるのだそうだ。

馬車で長時間揺られるのだから、当たり前か。

なので今は普段よりは意匠のこらした、だが比較的簡素なドレスを着ている。

「ミリー、私、ドキドキしているわ」

「ええええそうでしょうとも。サラ様は初めて外に出られるのですから……。珍しいものもたくさん見れましょう」

ミリーに以前聞いたことだが、10歳までの「サラ」も、屋敷の敷地内から出たことがなかったそうだ。

「親しくしてくださるお友達ができるかしら」

あれから、もう一度ジン兄様が家に帰ってきてくれて、私が困らないようにと、今日集まる貴族の令嬢方——今日は令嬢のみの集まりだそうだ——の特徴や家名、名前、年齢等は教えてくださった。

『あまり気を許しすぎないように』との忠告つきで。

だが人となりは実際に会って喋ってみないと分からないだろう。

「大丈夫ですわ。サラ様はお優しくいらっしゃいますから。きっと皆様、仲良くして下さいますよ。ミリーがもし貴族の令嬢でしたら、ぜひともサラ様と親しくさせていただきたいですもの」

「ふふ、ありがとう、ミリー」

ミリーは私の気持ちが分かるようだ。欲しい言葉をたくさんくれる。

「サラ様。ジルンアス様からも念を押されていましたが、私の傍から離れませんようお願いいたしますね」

「大丈夫よ。王宮は侯爵家の屋敷とは比べ物にならないくらい広大

とは聞くけれど、迷子になったりしないわよ」

ジン兄様も、ミリーも心配性だ。

「あら何を仰っておいんです。侯爵家のお屋敷内ですら迷子になってたのは誰でしょう?」

そう言っミリーは昔を懐かしむようにクスクスと笑う。

5年前を思い出して、私は赤面する。そうだ、あの頃は右も左も分からず、うっかりミリーと離れたりしたら屋敷内で道に迷っていた。(精神的には)15歳だったのに、恥ずかしい。

とりあえず、ミリーと離れなければいいのだ。

ああ、王宮はどんな所だろうか。

きつときらびやかに違いない。

たくさんの装飾に、たくさんの絵画。

広い庭には噴水とか、たくさんの木々や花々。
お散歩できるかしら。

楽しい想像ばかりで、思わず微笑む。

それを見てミリーも安心したように微笑んだ。

* * * * *
* * * * *
* * * * *

「あつ。ジルンアス様。ついにとうとうなんですね！」

「・・・何がです」

王太子殿下の執務室へ向かっていると、殿下のヴァレットであるバトラーに回廊で呼び止められる。

毎回、このヴァレットのなぜか要領を得ないような会話と、底抜けの明るさにイライラさせられる。

もちろんそれが「作って」いることはもちろん気付いているが。

「聞きましたよー!」

「ですから、何をです。端的に言いなさい。バトラー。私は暇ではないのです」

「やっと『隠れ姫』様がおいでになるのですよね!」

「・・・・・・・・」

「あれ？ジルンアス様――？?」

バトラーをそこに残し、むしろ存在すらなかったことにして私は先ほどまでよりも早足で執務室へ向かった。

「おお。ジン。聞いたぞ」

「・・・何をですか」

今度は宰相としての知識を教えてくれた師匠ともいうべき現宰相に会った。

ここで何をしているのか・・・。

そんなことはさておき、嫌な予感と共に、一応聞き返す。

「『隠れ姫』が来るんだって？楽しみだのう。一度拝顔してみたかったのじゃ」

ふおっふおっふおっと、長くした白髭をなでながら笑うそのお方を思わず一睨みしてしまったら、目を逸らされた。

「お、おおそうじゃった。王の執務の最中であつた。ではワシはこれにて」

かなりの年齢のはずなのに、その動きだけは早く、あっという間に見えなくなった。

そうだ、私は先を急がねばならない。

バン！！！！

「殿下貴方ですか！！！」

勢いよく開けた扉にビックリしたのか、殿下が窓際で伸びをしたまま固まっている。

ついでに、部屋の外側、扉付近で突っ立って・・・もとい、警護し

ている親衛隊のお二方も目を丸くしていたな。

おや。殿下ときたら机に向かって仕事をしているはずなのですが、なぜ窓際にそれも立っているのでしょうか……。おかしいことですね。

「どど、どうしたんだジルンアス君。ノックくらい「気持ち悪い呼び方をしないでください」」

殿下の言葉を遮ってピシャリと言い放つ。

「まあまあ。ちょっと仕事の息抜きをしていただけじゃないか。あまり根を詰めるのもよくないだろう?」

「殿下の場合は怠けすぎです。それよりも殿下。先ほどバトラーと宰相におかしなことを言われたのですが、お心あたりはありますか」
「ありますか?と聞きながらも確信を持って問い詰める。

「はて? う〜〜〜〜ん……………」

わざとらしく考える殿下に、私はさらに詰め寄る。

「殿下」

自分でも驚くくらい低い声が出た。

殿下は寒いのかブルっとした後、

「ああ、もしかして隠れ姫ちゃんのこと？」

・・・やはり殿下でしたか。

自分の口角が上がるのが止められませんね。

「ちょ、ジンその顔怖いつて！いつもの無表情のほう全然マシ！笑ってるほうが怖いってどういうこと！？」

「殿下、ご説明願いまししょうか」

「いや、それはその……間諜が知らせてくれてさー」

間諜……なるほど、だから今回のことも知っているのか。それにしても……

「貴方、私の家に何張らせてるんですか」

「だってここ最近、お前ちよつとソワソワしてるからさ。他の奴らは気付いてないだろうけど、俺はちゃーんと気付いてさ。これは何かあるなっと思って。面白そうな……あ、いや。困ったことでもあるのかと思って、そりゃあ心配になってちよこつと張らせただけだつて。ああ大丈夫、俺の専用間諜だし。何か得られたとしても政治的には影響しない。それにお前の父親がそんなヘマするか？ 大方張らせてることも気付いてるっつーの。あ、それに男じゃなく女張らせてるからご心配なく」

「そういう問題ではないでしょう」

「んじゃ、男張らせてもいいの？ 侯爵家に？」

「そんなことしてみなさい。問答無用で叩き落とします」

知らない男がサラを見ているだなんて・・・そんな考えただけでも腸が煮えくり返る。

即座にとっ捕まえて、カイに、生きたまま地獄を味わわせてやりたい。

「・・・ジン？お前、今物騒なこと考えてない？」

「おや、さすが私のことがよく分かっておいでで」

「ま、まあもうすぐ来るんじゃないの？サラちゃん。早く会いたいな」

「おかしなことを仰いますね。殿下は仕事がたんまり溜まっているのですから、誰かと会う時間なんて微塵ありませんよ」

「え、ええ！？会えないの！？サラちゃんに会う気満々なのに！」

「戯言を。それに勝手に私の妹を気安く呼ばないでいただきたい」

「・・・俺、王太子なんだけど」

「もちろん存じ上げておりますよ。それに殿下にはお気に入りの公

爵令嬢もいるのでしょう」

だから、サラには手を出すな。ちょっかいをかけるな。目に入れるな。

そう無言の圧力をかける。

ああサラ。

道中何事もなかっただろうか。もう着いただろうか。

傍に行つてやりたい気持ちが抑えられない。

11（後書き）

ヴァレット「近侍、従者のことで、主人の身の回りの世話をする人を指す。

殿下登場。ジンには少々弱い。そして軽い・・・。
ジンさん暴走気味。

一部日本語の間違いがあったので訂正いたしました。教えてくださった方、ありがとうございます。

まさにおとぎの国に紛れ込んだようだった。

想像でしかなかった宮殿。

まさに、思い描いていたお城のイメージぴったりで、しばしその姿に圧巻した。

城下町に入り、人通りが多くなって、お店の店主や売り子の掛け声がこだまし、賑わいが耳をついた。

そうしてまた少し馬車を走らせ、やがて城門から中に入る。

当然騎士が出入りの馬車に目を光らせていたが、サラの乗った馬車は侯爵家の紋章が入っているためほぼ素通りで入れた。

広大な庭が見える中をさらに進み、やがて一つの建物へ。

一口に宮殿といっても、主に外交の場や賓客を迎える宮殿、王族の式典が行われる建物、騎士専用の鍛錬上や寄宿舍、王族の私室が並び建物や、客間、城で働く者たちの寝泊り専用の建物等が並んでい

る。

サラを乗せた馬車は貴族や他国の賓客のために用意された客間がある建物へと向かう。

高鳴る胸を押さえきれず、馬車が止まって御者から着いた旨の声が聞こえた時はサラの心臓ははちきれそうだった。

「サラ様、さあどうぞ」

ミリーが素早く手を差し出してくれ、タラップを降りる。

そっと踏み出した一歩は、柔らかな芝生の上へと落ちた。

ホッと息を吐く。大きな一歩、境界を越えたような気分だ。

そうして、貴族の令嬢らしく、侯爵家の名に恥じないようにと、姿勢を正し、真っ直ぐ前を見る。

「お待ちしておりました」

その声と同時に頭を下げたのは、迎えに来てくれた恐らく客室専属の侍女たちだろう。

客室専属ともなれば、対外的な関係もあって一流の侍女がつくという。

美しく、身のこなしも流れるようだった。

「お世話になります」

ミリーも礼を返す。

出迎えてくれた侍女たちに従い、サラとミリーが後に続く。

侯爵家から持ってきた衣装は、他の侍女が持ってくれた。

通された客室は、シンプルだけどそこかしこに豪華な調度品がある、
落ち着いた雰囲気の部屋だった。

「まあ、素敵」

大きく取られた部屋の窓からは、中庭へと下りることのできる階段
が数段ついていて、
丁寧に整えられた庭が見える。

後で散歩できたらいいな、とサラは思う。

「何がご入用や御用がありましたら、何なりとお申し付けください
ませ」

「ありがとう」

客室専用の侍女が恭しく言ってくれたのでサラは礼を言う。

とりあえず、あまりゆっくりしている時間はないようだ。

急いで支度をしなければ。

と、その時。

「おつ。サラよく着たな」

との声に振り向くと、カイの姿が。侍女たちがその姿に頭を垂れる。

「カイ兄様！！！」

一ヶ月ぶりの再会とあって、サラは嬉しくなりカイに抱きつく。

もちろんサラが駆け寄って思いっきり抱きついてても、ビクともしない。

「兄様、どうしたの？お仕事はいいの？」

抱きついたまま、サラが見上げながら尋ねると、優しそうな表情で

カイがサラの頭を撫でる。

「もうすぐ交替の時間だが、今はまだ空いてるんだ。サラが来るのを待ってたぞ。何も問題なかったか？」

「ええ、大丈夫よ。ミリーと楽しくお話しながら来たわ。兄様、私、ワクワクしているの。初めて外へ出たのよ！それにとっても素敵なお城ね。夢のようだわ。兄様たちはここで働いているのね」

「ああそうだ。ここでサラと会うのは変な感じだな」

相変わらずサラの髪を撫でながら、クシャッと笑う。だが次の瞬間には真面目な顔つきになって

「いいかサラ。ミリーから離れるなよ。ここは広いし、特性上迷いやすいような造りになっている」

「兄様までミリーと同じようなこと言うのね。15歳にもなって迷子になったりなんかしないわ」

少しむくれて見せると、カイはその頬を優しく包む。

「それもあるが・・・、まあ、何か危ないことでもあったらすぐに叫べ。俺が助けてやるからな」

「危ないこと？」

「変な場所へは行くな。あと男には絶対近付くなよ。話しかけられても無視をすればいい」

「まあ・・・」

少し見たただけだが、平和そうな宮廷内だったし、それに変な場所・・・？男に近付くな・・・？

カイ兄様はおかしなことを言う、とサラは思った。

それでも、兄様の心配が伝わってくるような気がしたので、サラは安心させるように微笑んだ。

「分かったわ兄様。安心してちょうだい」

「カイルアス様恐れ入ります。サラ様のご用意がありますのでそろそろ・・・」

時間を気にしていたらしいミリーが割って入る。

「ああすまない。ではミリー、くれぐれもサラのことを頼むぞ」

「はい、お任せくださいませ」

カイは名残惜しそうにサラの頭に口付け、部屋を出て行った。

ほう・・・と部屋の隅でため息のような声が聞こえたと思ったら、部屋付きの侍女たちが少し頬を赤らめていた。

ドレスの着衣や髪を結うのを手伝ってもらっている間に侍女たちと親しくなって——サラと話したくてウズウズしていたらしい——聞いた話だが、

カイに憧れている女性が多いらしい。

今みたいに間近で姿を見て声を聞くことは滅多にないため、だから侍女たちは頬を染めていたようだ。

「皆、お会いするのを楽しみにしていたのです」

「私に？」

「はい。カイルアス様と、ジルンアス様の妹姫。今までほとんどその姿を見た者がいない。それが、1週間ほど前でしょうか。妹姫様が宮廷にお越しになるという噂が広まって」

「まあ、そうだったの？」

「それから皆会いたくてたまらなかったのです。ああ、噂どりの可愛らしいお姿で——銀系の髪も稀有な美しさですわ。こうしてお世話ができることが幸せです」

ミリーは「そうだろうそうだろう」となぜか自慢気に頷いている。

支度が終わり、鏡の前に立つ。

「まるで妖精のようすわ」

「本当に、何てお可愛い」

「淡いピンクのドレスが、また優しい雰囲気醸し出していますわ」

口々に賞賛されてサラは恥かしくなってしまう。

頬を赤らめて照れるサラの純粹さに、部屋付きの侍女たちが優しく見つめる。

サラはそつと鏡の中の自分を見る。

こうして改めて見てみると、本当にこれが今の自分の姿なのかと疑ってしまう。

母とミリーが1ヶ月かけて選び抜いたドレスやアクセサリーは、サラをあますところなく着飾り、それでいて主張しすぎることもなく落ち着いた輝きを放っている。

5年も経てば見慣れた顔のはずなのに。

それでも微笑めば、鏡の中のサラも微笑み返してくれる。

これが、私。

これが、サラ。

何度も言い聞かせる。

「さあ、それでは参りましょうか」

サラは、踏み出す。

12（後書き）

不完全燃焼な文章になってしまいました・・・そして進展しない・・。

お読みいただきありがとうございます。

「はあ・・・困ったわ」

私は見渡す限り緑、緑、緑、時たま赤やピンク、黄色の中で途方に
くれていた。

「どこへ行けば出られるのかしら」

先ほどまで歩いていたのだが、余計に深みにはまっているような気がしたし、足も疲れてきたし・・・でその場に立ち止まった所だ。
頬に手を当てて考える。

いや、考えたってどうしようもない。なにせ初めて来た場所なのだから、道が分かるはずもない。

そう、現在私は道に迷っている最中です――

「ミリー、困っているかしら。いいえ、きつと怒っているわ」

あれだけ「傍から離れないように」「はぐれないように」と忠告されてきたのに。

兄様たちだけにはバレないようにしなければ。
何を言われるか分からない。

せっかく外出許可がされたのに、一日で取り消されるかもしれない。

それだけは絶対に阻止しなければ。

でもその原因はもれなく私にあるわけで・・・。

「ああ、どうしましょう」

そう、ちょっと立派な庭園を見たかっただけ。

今日の貴族令嬢のお茶会の会場は、庭園の一角にあるらしく
部屋付きの侍女に伴われ、ミリーと共にそちらに向かっていたのだ。
庭園の中をどうやって通っているのか私には分からなく、それでも
侍女たちの後についていった。

そうしたら、

あまりにも美しい花々を見つけて。

少しだけ、ほんの少しだけ見てみたいと思ったのだ。

もちろん声をかけた。

「まあ、ミリー。見て、あそこに綺麗な花が咲いているわ。何ていう花かしら……。ちょっとだけ見ていても構わない?」

と。

だが、その間の視線が花に注がれていてミリーたちから視線を外していたのが原因なのか。
思わず足を止めてしまったのが原因なのか。

『構わない?』の所で前方に視線を戻すと――

侍女たちの姿が、なかったのだ。

宮殿内なら何とかなっただかもしれない。

迷いやすいように作られているといっても、建物内だから。方向さえつかめば何とかなるだろう。他の使用人に会えば案内もしれえよう。

だが、庭園を歩いていたとあつては——
道という道も作られているわけではない。

自分が迷ってしまったという心細さもそうだが、
何よりも心配があつた。不安があつた。

「侯爵家の令嬢が、招かれた王城で迷子になつた」
だなんて噂がたりたりしたら・・・。

きつと侯爵家の顔に泥を塗ってしまうことになるだろう。

それに、私がいけないことにミリーたちが大騒ぎして、手間をかけさせてしまうかもしれない。

ああ、どうしよう。

侯爵家に恩を返すどころか、お役に立つどころか、とんだ迷惑をかけてしまうかもしれないなんて。

「父様・・・母様・・・ジン兄様・・・カイ兄様・・・」

顔が思い浮かぶ。そうするとじんわりと涙が滲んでくる。

ああダメよ。15歳にもなって泣いてなんかいたら。それも原因が迷子で。

でも、一体どうすれば・・・

「こんなところで、どうかしましたか？」

突然背後から聞こえてきた声に、文字通り飛び上がりそうになった。

「ああ申し訳ございません。驚かせるつもりはなかったのですが・
」

落ち着いた男性の声だ。落ち着いたといっても、声は張りがあつて若々しい。

振り返つてみれば、そこには背の高い、庭師が立っていた。

頭から日差しを遮るためか、頭巾のような布を被っているため、頭と、陰になつて顔の上半分も見えない。

手には剪定ばさみを持っていて、手袋をはめているが土がついている。

やはりまだ若いのだろう、庭師という意外と体力のいる職種のためか体はスツキリと引き締まつていて、姿勢も良い。

「いえ、こちらこそ驚いたりして申し訳ありません」

はやる動機を抑えて答える。

「お見かけしたところ、どこかのご令嬢のようですが……。こんな所に何の用で？」

まさか「迷子になりました」とも言えない。庭師一人といえども、どこからどんな噂がたつかもしれないのだから。

「え、ええと……。す、素敵なお庭だと思って少し散歩していました」

我ながら、ウソをつくのが下手だわ。ここは貴族としての気品を漂わせなければならぬのに。

せめてもと、姿勢を正して真っ直ぐに庭師を見据えた。

だが、庭師の口から漏れたのは、思わず笑ってしまった、といった感じの息。

「それは光栄でございます。それならば、こちらにはもっとお気に召すような花がありますよ」

口を笑みの形にして、その庭師はどこかへ誘おうとする。いかにも慣れたような案内の仕方に、思わず着いていこうとして――

（いけないわ、兄様たちにも言われたじゃないの。男には近付くなと）

警備体制が厳重な宮殿内に怪しい人物がいるはずもないが、サラは踏みとどまった。

「お気遣いありがとうございます。ですが結構ですわ。もうすぐ迎えが参りますので」

やんわり断ると、庭師は口を笑みのままにして

「そうですか、それは残念です。ああそういえば、この先では貴族のご令嬢方のお茶会が開かれるようですよ。もしやそちらからいらしたのですか？」

と、一方向を手で指し示した。

思わず耳がダンボになった。

まあ、今とても素敵なことを言われたわ。この方向へ行けば、私が今から出席しようとしているお茶会の会場があるのね！

「え、ええ。そうなのです。私はその場所から少し散歩に来たのです」

なので、決して迷ったわけではないのですよ。

そういったニュアンスで答えれば、納得がいったというように庭師は大きく首を縦に2度振った。

「左様でございましたか。どうやらもうすぐ始まるようですよ」

「そうですね。それでは私はこれで失礼いたします」

そうだった。時間が差し迫っているはず。

私は庭師の横を通り過ぎ、先ほど手で指し示した方向へ歩みだす。

「あ、少々お待ちください」

庭師に引き止められ、私はクルリと振り返る。

その時、思わぬ近くに庭師が立っていたのに驚いた。

近くに立てば、庭師の背の高さが強調されるようで、私の頭の高さが庭師の首の下といったところだ。

（カイ兄様と同じくらいかしら——）

と呑気思いながらも、兄様意外の異性とこんなに至近距離になったことがないため思わず頬が赤らむ。

そうすると、結わえてあった髪に、何かが刺さる感触があった。

不思議に思いその場所に手をやると、何か柔らかいものに触れた。

「お嬢様に似合うかと思ひまして」

その言葉に見上ると、庭師は微笑んでいた。相変わらず口元しか見えないが。

どうやら花を挿してくれたようだ。

手袋を外して挿してくれたのだろう。庭師はいそいそと手袋をはめなおした。

「ありがとうございます」

「おや、お珍しい。私のようなたかが庭師にまで礼を仰るとは」

そうだ。最初の頃はミリーを初め、侍女に世話をしてもらったびに礼を言つて、その度にかなり恐縮されたり、礼を言うことを止められたりした。

だが・・・

「お礼を言いたいから言っただけです」

当然のことだ。

「それでは、失礼します」

スカートの端を持ち上げ微笑み礼をする。

そうして庭師に教えてもらった（・・・のかは分からないが）場所
へ向かう。

その後姿を、庭師がずっと見ていたとも知らずに。

14（前書き）

さくさくっと進めていくとになります。
やっとお茶会。

庭を進むと、そこは・・・

お茶会の会場でした。

「サラ様！！！」

案の定、私が姿を見せた途端にミリーが大慌てで駆け寄ってきた。

「サラ様、どれだけ心配したか……。あれほど、私から離れないようにと申したではありませんか。

お姿が見えなくなった時といったらもう……。心臓が潰れる思いでしたわ」

「ごめんなさい、ミリー」

私が全面的に悪いので素直に謝る。

「ミリーさん、落ち着いてください。見つかって良かったではないですか」

先ほどの客室付きの侍女が興奮するミリーの肩に手を置く。侍女同士仲良くなったようだ。

どうやらここは、お茶会の準備をする場所らしい。少し木陰に入った所で、ティーカップやらポットの準備がされている。

「皆様が、探すのを手伝って下さったのです。もしかしたら先にいらっしゃるかもしれないと思って、ここに着いたところです」

「本当にご迷惑をかけてしまいました」

ミリーの言葉に私は侍女たちに向き合う。すると「とんでもないとばかりに恐縮された。」

「あの、ミリー。このこと、兄様たちは・・・」

「まだご存知ありませんよ。もう一時サラ様が来るのが遅ければ、お伝えしに行くところでした」

「そう！良かった。お願いよ、ミリー。兄様たちには言わないで」

「そう仰るだろうと思っておりました。もう二度と、しないでくださいね」

肩をすくめてみせるミリーに、心の底から感謝する。

「さあお二方。もう皆様が集まってらっしゃる頃ですよ。そろそろ行かれなくては」

そうだ。社交界はまだ先だけれど、ここが私の第一のデビューだ。私がすっかりしてないから、手間取ってしまったけど……。今度こそは、侯爵家の名に恥じない行いをしなくちゃ。第一印象が大切っていうし。

「貴方がかの噂の『隠れ姫』様ね」

「お会いするのを楽しみにしておりましたわ」

「まあ、そのお召し物。ウォルシュレーデン商会の生地ではありませんこと？素敵ね」

挨拶をすませると、ご令嬢方がにこやかに話しかけてくれた。

上は公爵から、私と同じ侯爵、伯爵や男爵令嬢までいる。

既に社交界デビューをしている令嬢もいて、パーティーなどで得た情報の交換もしているそうだ。

さすが貴族。目にも鮮やかなドレスを着こなしていて、色とりどりのドレスは花のようだ。

「『隠れ姫』だなんて言うくらいだから、よっぽど外に出られないご容貌をしているのかと思っておりましてよ」

扇で口元を隠しながら鋭い視線を向けてきたのは、公爵令嬢のマーガレット様。

赤毛の巻髪がその内に秘める情熱さを物語っているようで、女性としての色香が匂いたつ。

ジン兄様が与えてくれた情報によれば、去年社交界デビューを果たした、私より2歳年上の方。性格は・・・キツイらしい。

公爵令嬢の棘のある言葉に、他のご令嬢方は私から視線を逸らす。公爵家といえば筆頭貴族であるだけに、表立って私を庇おうなんて気持ちはもちろんないのだろう。私もそんなことは望んでいない。

「私もマーガレット様のようにお美しかったならば、喜んで外に出ましたものを」

否定も肯定もせず、私返した言葉にフンッと鼻を鳴らし、だがそれ以上は何も言われなかった。

ああ、これが洗礼というやつかしら。貴族は腹の探りあいとはよく聞くけれど。こんなあからさまな方もいるのね。
プライドが高く、風当たりが強い方がいることは予想はしていたけれど。

「あら皆様、もうお揃いかしら？」

そこへ、違った声が入ってきた。

反射的にその声の主へ礼をしてみせる令嬢方にならって、私も膝を軽く曲げ、ドレスの裾を持ち上げ最敬礼をした。

「お話を楽しむためのお茶会よ。お顔をお上げになって」

その声に、ゆつくりと顔を持ち上げる。不躰にならない程度に、声の主の顔を見た。

この方が――

今回の主催者。

第一王女殿下のエリザベス様だ。

マーガレット様と同年で二人は仲が良いらしい。・・・というか、マーガレット様がエリザベス様の後を追いかけるようにしているのだとか。

悪くいえば腰ぎんちゃくか。

それにしても・・・。

ハッキリとした目鼻立ち。王族さながらの気品溢れる出で立ち。

家柄の順序で、まずマーガレット様が挨拶をし、その後で私も招かれた礼と挨拶をした。

「あら、貴女が。ずっと生家に隠れていたんですってね。よっぽど居心地が良いのね、オイレンブルク侯爵家は。この会が楽しめるとよいのだけね」と

その言葉に、マーガレット様がクスッと笑う。

「ほら、エリザベス様が仰ってくださいっているのよ。何か返事でもなさったらどうなの？」

「何て綺麗なお方・・・」

「は？」

思わず呟いた私に、眉を潜めるマーガレット様。

でもいいのだ。今はマーガレット様ではなく、王女殿下から目が離せないのだから。

「王女殿下、国の至宝と言われるお方。何てお綺麗なんでしょう！私・・・王女殿下にお会いできただけで、嬉しく思います！」

驚いたのだ。

王妃に似たそのお美しさは有名で。

実際に間近で対面して、シミ一つない綺麗な肌、ふんわりとしたドレスの袖から覗く白い手、立っているだけで圧倒されそうな気品。そのどれもに感激した。

私は綺麗なものや可愛いものが大好きだ。

「ま、まあ、立っているのも何です。皆様お座りになって。さっそくお茶会を始めましょう」

王女殿下は私からそっと目を逸らされされてしまった。残念だ。そ

の緑の瞳に映っていられることも嬉しかったのに。

そのままの立っていた位置の関係上、運良く誕生日席に座った王女殿下の角を挟んで右に座ることができた。

「そつえば貴女」

王女に話しかけられ、「はい、殿下」と返す。

「私のことは『王女殿下』ではなく名前で呼んでくださってもいいのよ。私の名前はご存知？」

「もちろんでございます。エリザベス様」

ああ、何ということだろう。王女殿下・・・エリザベス様からお名前と呼ぶことを許されるなんて。

後から聞いたことだが、エリザベス様が初対面で名前で呼ぶことを許すことはかなり珍しいことだったらしい。

「私のことは、どうか『サラ』とお呼びください」

「そうね。機会があったら呼ばせてもらおうわ」

私の初めてのお茶会参加は、こうして和やか(?)に始まりました。

若干一名、鋭い視線をひしひしと感じますが・・・。

14（後書き）

エリザベス王女。実はツンデレ。
サラが自分を見るキラッキラな瞳に、「小動物みたいで可愛い」と思ったとか。

閑話 我が愛しの妹姫（前書き）

ジン、カイ両兄の視点です。読まなくても本文に支障はありません。

閑話 我が愛しの妹姫

私の名はジルンアス。

オイレンブルク侯爵家の嫡男としてこの世に生を受けた。

両親はとても仲が良く、小さい頃から2人の仲睦まじい様子を見ていて……

正直、冷めた目で見ていたと思う。

侯爵家嫡男として次期当主になるべく、物心つく前からこの国の政治、歴史、今は戦争はないが戦術や文芸に至るまでありとあらゆる知識を培ってきた。

幸い、私には比較的飲み込みと理解力と記憶力が強く備わっていたらしく、家庭教師に驚かれるほどであった。

だが、日々の勉強の中には、「愛」だの「恋」だのはなかった。

両親は尊敬しているが、冷めた目で見てしまうことは、このことが要因であったように思う。

私には2歳下の弟がいる。カイだ。

当時2歳の私には、「弟」という感覚はあまりなかったように思う。いつの間にか小さいものがあるな、といった感じだ。私も小さいだろ、という反論は聞かないでおこう。

私が5歳、カイが3歳の頃。私はもう家庭教師について朝から夕方までみっちり講義を受けていて、兄弟間の関わりはさほどなかったが、両親の意向でよく茶を共にした。

もちろん食事は一緒だ。「よく食う奴だな。だからそんなに大きくなるんだ」と、日々大きくなっていく弟を眺めた。

7歳になった時は「才児」として私はちょっとした有名になっていた。

吸収できるものは貪欲に吸収した。どんどん増えていく知識が楽しくて仕方がなかった。

だがそれを何かに生かそうだとかは考えていなかった。

ただ、侯爵家の嫡男として、自分の代で潰さない程度に、最低でも現状維持ができればいいと思っていた。

「夢」や「希望」や「野望」がなかったのだ。

7歳でそれは冷めていたと、後に両親に言われた。

幼い頃より使用人に傳かれていることも当たり前のことになっていた。

そんな時、母が懐妊したと知らされて、驚いた。

2人兄弟で終わると思っていたからだ。もし長男の私に何かあっても、次男であるカイが侯爵家の当主になるだろうと。男児を2人産

んだ母は、立派に貴族としての役目を果たしたのだと。

そして、相変わらずの父母の仲の良さにあきれ果てたものだ。ああ、その時には子がどう成されるのか理解していたのであしからず。

カイの時は私も小さかったので覚えてはいないが、7歳となった時には日々膨らんでいく母の腹を見て腹の子が順調に育っていく様を目の当たりにした。

ある日、母の手に誘われて、臨月となった母の腹に手を当てた。ポンっと、手に伝わってきたのは、腹の子が蹴る感触で。人体の神秘さに感動を覚えた。

弟だろうか、妹だろうか。性別に興味はあまりなかったが、産まれてくる赤子はどんな感じなのだろうか、気になった。

私が8歳になった時、サラが誕生した。

屋敷が騒がしく、どこかソワソワした雰囲気勉強どころではなく、珍しくカイの相手をしながらその時を待った。

やがて産声が聞こえてきて、しばらくしてから侍女頭が私たちを呼びにきた。

出産に疲弊しながらも、どこか誇らしげな母。その傍らで、穏やかな優しい顔をしている父。

そして、母の胸に抱かれて、泣き続けている——赤子。
女の子だと、母に教えられた。

うつすらと銀色の髪が頭を彩り、その全てもが小さく小さく。
やがて泣き止みスヤスヤと眠る赤子を見て、心の底から「天使だ」
と思った。もちろん私は冗談なんぞ言わない。本気で「天使だ」と
思ったのだ。

それからというもの。

私は勉強の傍ら、よく母の寝室へ行っては赤子を見た。

初めて目を開けて私を見た時。

私に向けて伸ばされた小さな手。

必死で何かを訴えかけようとしている、言葉にならない声。
不思議そうな目で見上げられた時。

そして、ふにや、と笑いかけられた時。

私は頭を鈍器で殴られたような、頬を思いつきり張られたような（
もちろんそんなことされた経験はない）、衝撃を受けた。

ハイハイをし、

よちよちと立ち上がり、

私の後を必死で着いてこようとする姿。

そして、日々愛らしさを増していくその姿。真っ直ぐな銀髪は夜の
化身のよう。

真っ白でふつくらした頬は、甘いものが嫌いな私でも「食したら甘
いだろうな」と思わせるもので。

長いまつ毛に縁取られた大きな瞳は宝石の輝きを持ち。

侍女達は「まるで妖精のようだ」とはしゃいでいたが、私には妖精

にも天使にも見えた。

数々の名画を見てきた。有名なアクトレスの観劇もしてきた。だが、そのどれよりも、妹は可愛らしく、庇護欲をそそられた。初めて、父母の間に流れる「愛」というものを、理解できた。

そうしていつの日にか、私には「夢」ができた。「希望」を持った。この妹のために、妹が過ごしやすい世界を作ろうと。安心して暮らせる国を作ろうと。

妹が幸せを感じることが出来る環境を作ろうと。

サラが危険な目に合いそうになったら、この身を挺してでも救おう。悪意から守ろう。

サラの目にはできるだけ綺麗なものを見せよう。

耳には綺麗な言葉を聞かせよう。

口はいつも笑みを浮かべるような、空間を作ろう。

ああサラ。でも兄は心配だ。

日々美しさを増していくお前が。

人前に出でもしたら、いつか誰かにさらわれてしまうのではないか。人を疑うことを知らない優しいお前が、誰かに騙されてしまうのではないか。

それを避けるためには・・・

そうだ、人前に出さなければいい。

悪事を企む奴に会わせなければいい。

屋敷から、外に出さなければいい――

俺はカイルアス。

オイレンブルク侯爵家の次男としてこの世に生を受けた。

生まれた時には既に兄がいたが、残念ながら、兄に遊んでもらった
り構われたりといった記憶はない。

俺の中では兄は「遊んでくれない存在」として定着した。

好きなことは・・・

食えることと、体を動かす事だった。

両親から「貴方は本当によく食べる子だった」と昔をしみじみと懐
かしまれるくらいだ。

侯爵家の次男としての役割といえば、一つ。

長男の有事の際にはその助けとなること。

有事とは、例えば病弱で爵位を継げない場合。不慮の事故で亡くした場合。

滅多にあることではないが、才が劣っている場合。

だから、俺も幼少の頃より家庭教師がつけられた。

だが俺は机に向かって勉強することよりも、体を動かす事が好きだった。

それに気付いた父は、すぐさま俺に剣術の師をつけてくれた。もちろん最低限の政治や国のことは知識として得ておくことが条件だったが。

やりたいことをやらせる、特技や興味があることを伸ばすことを良しとした父に、尊敬の念を抱いている。

貴族出の母も、父のやり方に異を唱えることはせず、暖かく見守ってくれた。

「貴方ってば、こんな所に筋肉がついてしまつて・・・」と、嘆かれたことはあったが。

2歳上の兄はといえば、俺とは違って優秀な頭を持っていて、完全に趣味が合わなかった。

仲が悪いわけではなく、互いの分野を侵すことなく良い距離を保っていたのだ。

そんな俺に、6歳の時妹ができた。

楽しみで仕方がなかった。

これまで、侯爵家で一番年齢が下なのは俺だったので、いつも「まだ助けが必要な幼い子」として認識されていたからだ。

もちろん6歳の時点で周囲の助けを必要としなく一人で生きていく子供などいやしないが。

もし男児だったなら俺の剣術の相手をさせようと思っていた。

その日、珍しく兄が部屋にやってきた。その日ばかりは剣術の稽古はせずに部屋で大人しくしていようと思ったのだ。

何かしら話していたとは思うが、記憶がそれほどあるわけではない。大方「弟だろうか、妹だろうか」という取りとめもない話だったのだろう。

やがて、聞いたこともないようなとてつもない泣き声が聞こえてきた。

侍女に呼ばれ、部屋に行くと、母に抱かれ小さな生き物がいた。

ああ、人間はこんなにも小さく頼りなく産まれてくるのだな、と思った。

そういえば以前、母の部屋に行った時に、母が実家から持ってきたという人形を見せてもらったことがあった。

かなりのお気に入りの人形で、大切そうに飾ってあったそれ。

有名な人形師が精魂こめて作り上げたのだという精巧で愛らしい人形。

この小さな生き物は、その人形に心なし似ているような気がした。違ふところといえば、全身で泣く生命力と、赤く染まる頬に感じる「生」だろう。

その小さな手にそつと指を近づけてみると、その姿からは想像もつかないほど大きな力で指を握られた。

まるで「助けて」「どこにも行かないで」とでも伝えているかのよううで。

反射的に「守らなきゃ」「傍にいてあげなきゃ」と思った。

俺が、この小さな存在を。

この夢く、それでも生命力に溢れたこの存在を。

寂しい思いをさせることのないように。

もつともつと、強くなりたい。

もつともつと、大きくなりたい。

サラを守るために。

傷つくことなく、安心して過ごせるように。

サラが伸び伸びと成長できるように。

その環境を作ってやりたい。

自分の手で。

それからというものの、本腰を入れて鍛錬に励むようになった。

全ては、サラのため。

サラを守るため。

兄は兄なりに、考えがあるらしい。

全てを冷めたように見ているあの兄が、と最初は珍しく思ったもの

だ。

だがきつと兄らしく、その優秀な頭脳をフルに活用したものだろっ。
ならば、俺は俺なりに。

ああ、だけど――

四六時中、サラの傍にいられるわけではない。
綺麗なところばかりの国なんてない。

ならば。

少しでも危険から遠ざけるためには。
この屋敷から出さなければいいのではないか。

その考えは兄と一致した。

分野は違えど、目的は同じなのだとお互いが認識した。

やがて、俺は武術において名を知られるようになった。

「頭脳の兄、武術の弟」とは、オイレンブルク侯爵家の名物兄弟を
指す言葉として浸透している。

全てはサラのために。

ああ、だけどサラ。

力をつけたことでの唯一俺が後悔していることは。

力いっぱいお前を抱きしめられないこと。

その華奢な体は少しでも力をこめれば簡単に壊れてしまいそう。

・
・
・
それに抱きしめた時の兄の冷氣たっぷりの目線が怖えし。

16（前書き）

途中で閑話入れたせいで話数がおかしく・・・15話目がないです
が気にしないでください。

初めてのお茶会は、表面上は問題なく和やかに過ぎていった。

女性が集まった時の話題といえば、どこの世界も関係ない。
恋愛だ。

どこそこの子息は誰と恋仲にあるだとか。
誰それが叶わぬ恋をしているだとか。

密かに通じ合っている男女がいるだとか。
社交界でいつも女性に囲まれている方は誰だとか。

知らない世界の話を聞くのはとても楽しかった。

だが、マーガレット様の、時おり私を見る視線が痛いが……。

何だろう。この短時間でマーガレット様の気に触るような言動はした覚えはないのだが。

それに爵位でいけば、公爵家のマーガレット様は私の上。
必然的に私は彼女を優先すべき立場になるのに。
女性は謎だ。

と同時に、マーガレット様とは別の視線を感じる方がいる。私と同年の子爵令嬢のソレイユ様だ。

ジン兄様曰く、

「どちらかと言えば控えめな性格の方で、大それたことをするような大胆さはない。

まあ害にはならないだろう。友人になるにはちょうどいいかもしれないが、……まあその程度だ。」

と、最後の方は濁した感じで言われた。

他人が聞いたら失礼な言い方だっが。

垂れ下がった眉毛は、常に困った感じの印象を与えてくるし、全体的にふつくらした体つきの方だ。
ほんわりしたイメージ。

ちらちらと私を見ては、目が合えばどこか恥かしそうに目を伏せたり、ニツコリと微笑まれたり。

初対面のはずなのに、その意図が見えない。

一目惚れでもされたのかしら？

なんて、女性同士なのにそんなことを思う。

何度目かに目が合った時、意を決したように彼女が話しかけてきた。

「あの、私も『サラ様』とお呼びしても構わないでしょうか」

と。

「ええ、是非そう呼んでください。ソレイユ様」

私が答えると、彼女はぱあっと喜びを表した。相変わらず八の字眉毛は困った感じだが。

「あの、サラ様。ジルンアス様はご実家ではどういった方なのでしようか？」

「え？」

唐突に兄様の話をされて戸惑った。だって、今まで家族の話は出ていなかったから。

「あら。ソレイユさん。貴女本当にジルンアス様がお好きなのね。いつも遠目から見ているって、もう有名よ」

「マーガレット様・・・」

爆弾発言をしたマーガレット様に、一気にソレイユ様の顔が赤く染まる。

うつすらと汗もかかれて、見ていて不憫になってくる。

「さつきからチラチラと見ていたでしょう。聞きたくてウズウズしていたのね」

尚もマーガレット様が追い詰めるかのように言う。

ああ、でもこれで合点がいった。ソレイユ様はジン兄様がお好きなのか。

ジン兄様ももしかしたらこれを知っていて、濁したようにソレイユ様のことを教えてくれたのだろうか。

「そうですね……。兄はいつもお優しくしてくださいませよ」

マーガレット様からの攻撃に小さくなっているソレイユ様を助けようと、差し障りのないようにジン兄様のことを言う。

すっかりしたことを言うわけにはいかない。あくまでも表面的に、だ。

「私、執務中のジルンアス様しか拝見していませんが、いつもこう、冷静な顔をしておいですわ」

ソレイユ様は私の言葉に勇気を得たのか、勢い込んで乗り出してきた。

なんか、隠れて兄様のことを見ていそうだな、と思う。

「え、ええ……。ですが私はどちらかと言えば微笑んでいる方が多く見ます」

「やはりサラ様にはお優しいんですね？」

「はい。兄は優しいですよ。ソレイユ様がお見かけしたのはきっと執務中の兄だからですわ。普段はそんなことないですよ」

「まああ！羨ましいですわ、サラ様！」

両手を胸の前で握り締めて、憧れいっぱい目で見つめてくるソレイユ様に、私は少したじたじした。

「ソレイユ。その辺になさいな。サラが困ってるじゃないの」

見かねたのだろう、エリザベス様が嗜める。

「それに……」

と視線をある一方向に向ける。

「お兄様。そこにいらっしゃるのでしょうか。隠れてないでおいでになつたら？」

エリザベス様の言葉の意味を理解する前に

その場の空気が変わった、と思った。

ピンと張り詰めたような、そう、いつの間にか肉食獣に背中を狙われた時の小動物のような、緊張をはらんだようなもの。

「バレてたか。さすがベスだな」

カサッという茂みの音と共に現れた男性。

先ほどまでの威圧感を感じる空気とは違って、軽い口調。

一斉に席を立ち上がり、淑女としての最敬礼をするご令嬢方。もちろん私もその中の一人だ。

その姿を目にする余裕もなく、頭を下げる。

「ああいいよ。畏まらなくて。僕はただの邪魔者だからね」

そうは言うものの・・・

王女殿下であるエリザベス様が「お兄様」と仰る方。

それは、王太子殿下ただ一人に違いない。

誰一人として頭をあげる者はいない。

「全く、お兄様のせいで空気が台無しだわ」

さすがは兄妹。エリザベス様がため息交じりにづけづけと言う。

「ああごめんごめん。ほら、皆。ベスが怒ると怖いから、顔を上げてくれないか？」

その言葉にようやくそろそろ顔を上げる。

それでもその顔を直視することは躊躇われる。この国の未来の王に。

ジン兄様とカイ兄様が仕えているお方。兄様たちはあまりお仕事のことを仰ってはくれないから、王太子殿下の人となりは侍女たちの噂でしか知らない。

ここで粗相なんぞしうものなら、兄様たちにもきつと迷惑がかかる。

ドキドキしていたら、なぜか私の前に王太子殿下がやって来た。

（ななな、何で！？）

混乱しつつも、何かひっかかりを感じる。

その雰囲気。差す影の位置。声。そして鼻をくすぐる――

「初めまして、隠れ姫。やっと会えましたね。アルブレイ・ヴィルヘルム・フォン・ラインハルです」

気付いた時には、そっと左手が持ち上げられ、その甲にキスを落とされていた。

一瞬のことに何が起きたか分からず、だがその後キスをしてきた相手――王太子殿下がそのままの姿勢で私を見上げてきた時にはカーッと頬に熱が上がるのが感じられた。

ジン兄様と同じ、輝くような金色の髪。吸い込まれそうなほど深みを湛えたブルーの瞳。

エリザベス様と同じく、王妃譲りの端整な顔立ち。

だが笑みを浮かべた口元とは違って、その瞳はどこか私を伺うような、何かを見つけ出そうとしているもののようで私はすぐさま自分を取り戻した。

「王太子殿下。『初めまして』。サラミリア・チル・オイレンブルクと申します」

16（後書き）

ずっと出したかった王子登場。
ついでにサラちゃんの本名も登場。名前考えるのって難しいですね。
・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2950t/>

隠れ姫の憂鬱

2011年5月30日01時38分発行